

## 聖書に学ぶ

— 創造における聖霊の母<sup>はは</sup>的な活<sup>はたら</sup>き（『創世記』） —

門脇佳吉

ご紹介に預かりました門脇でございます。たくさんの方が来てくださりましてありがとうございます。また、今回のレジュメを、研究所の方々がたいへん苦勞して作って下さいました。まずその方々に感謝したいと思います。

今日の話はちょっと手がこんでおりまして、このレジュメでは難しいように見えますが、しかし中心は、聖霊の活<sup>はたら</sup>きはどのようなものであるか、ということをお話しようと思っております。

聖霊については、歴史的な研究の過程を見ますと、非常に進んでいなかった。というより、非常に遅れていたという方が適切かも知れません。聖霊について例えば聖イグナチオが生きていた15世紀、16世紀という時代には、宗教裁判とかああいうものがありまして、聖霊について語ることは禁止です。たとえば聖イグナチオの『靈操』という本がありますが、その中に、聖霊という言葉は出てこないんです。どうしてかということ、そういう、宗教裁判によってやられるからです。それほど、聖霊について語ることは非常に難しかった。だから研究も進んでいなかったということがあります。

しかし、現代は靈の時代であるべきである、というバチカン第二公会議の後の時代に、靈というものは非常に重視されたんです。そして大衆運動も起こったわけですね。しかし、その大衆運動よりももっと大切なのは、聖霊についての研究というのが非常にさかんになった、この30年か40年の間に。そして面白いことに、女性の神学者が、その間に生まれた。

それまでは神学者はみんな男性でした。ところが戦後、初めて聖書神学者の中に女性の神学者が生まれてきて、しかも聖書について語り、研究して、がらりと変わったんです。その女性のために、女性的なはたらきというものは、女性でなければわからないわけです。聖書を読んだときに、女性の目で、女性がどういうはたらきをするか、母がどういうはたらきをするか、ということをも女性の神学者はよく研究して。

例えば『創世記』の第一章、天地創造のところですよ。第一章の天地創造のはたらきは、神様が、超越的な神様が、男性的にもものをつくっていった、という考え方でもって、ほとんどの神学者たちは、男性的な目で、それを読んでいた。ところが三十何年前ぐらいに、一人の女性の聖書神学者が、すばらしい論文を書いたんです。

それは、この第一章でさえも、聖霊が創造のはたらきをなさって、しかもそれはずっと後になって、例えば『詩篇』の中に、たくさん、聖霊によって創造されたということが出ている。聖霊のはたらきは女性的なはたらきだ、ということをも、その神学者は発見するわけです。そしてそういう、神学的な革命が起こったんです。

だから女性の仕事というのは、これからね、大切であると思います。特にこの大学は藤の女子大学ですから、ここの学生にとっても、ぜひ、そういう働きが将来できるような人になっていただきたい、というのが私の今日の話の、冒頭の願いです。

そしてそのはたらきというのは、ずっと続いているんです。母、それから女性のはたらきというのは、まず子供を産むんですね。生む、ということ。たとえば、教会の誕生はいつでしたか？ 聖霊降臨です。その時生まれたのです。マリアさまが懐胎し、イエスさまが生まれるときには、聖霊によって生まれるんです。ですからその聖霊というものが、どれほど母のように、非常に慈しみながら、ものごとを生むとか、つくって世話をしていくか、その様子が、『創世記』の第一章にもずっと出ているわけです。男性はそれを発見できないんです。

その神学者の発見のきっかけは何かと言いますと、ヘブライ語で、聖霊というものをあらわすのは、「ルーアッハ」という言葉なんです。この「ルーアッハ」という言葉をぜひ覚えてください。それは、こういう字「Ruach」を書くんですけど、女性名詞なんです。これが非常に大切な

わけなんです。それがギリシャ語になると、中性名詞になるんです。「プネウマ」(pneuma)っていう。そして、さらにラテン語・ドイツ語ははじめヨーロッパ語では「スピリトゥス」(spiritus)「ガイスト」(Geist)に訳された。どれも男性名詞になるんです。面白いね。

性の変化にともなって内容上の変化が起こったんです。男性名詞ですと、みんな、聖霊は男性的な活きだ、と思ってしまうんです。そうでしょう、当然ですね。男性的なことはみんな男性名詞で書くわけでしょう。聖霊という言葉は、男性名詞の言葉で「デア ガイスト」(der Geist)とドイツ語で書いてある。ですからみんな、男性の活きと思う。しかし、原文のヘブライ語では、みんな女性名詞なんです。

その女性の聖書神学者は、その目で聖書を読んでいき、あ、あ、あ、今まで間違っていた！ということを発見するんです。私はそれを或る先生から習って、本当に驚きました。革命的な聖書の聖霊についての、女性の神学者の、働きです。それを前提としながら、ぜひ聖霊について深く考えていただきたいと思います。

聖霊の活きはたらの中で、どういうことが行われたか。

普通は、『創世記』第一章と第二章について、成立史的には最初に第一章があって、次に第二章があると思っているんですが、そうではないんです。第一章と第二章の関係をちょっと見てみましょう。

第一章は、紀元前だいたい六世紀ごろにできたと思われます。それから、第二章は、もっと古いんです。紀元前十世紀くらいにできた。紀元前十世紀というと、日本でいうとまだ縄文時代です。非常に原始的な時代です。しかし、イスラエルの国民は、ちょうどメソポタミアの文化とエジプト文化の真ん中であって、非常に文化的に高いんです。日本と全然違う。言葉も、ヘブライ語が書かれるようになって、アルファベットで書かれるんです。その前は、エジプト文化は象形文字で、メソポタミア文化は楔形文字でした。これは普通の人は習えないです。だから、アルファベットの言葉であるということは、みんな、庶民が読めたということです。そういう文化の中に、紀元前十世紀の中で書かれた、それが第二章なんです。しかし原始的なものですから、非常に単純な書き方をしている、詩的な文章で書かれていて、単純で詩的で、それこそ素敵な

文章だということです。

その第一章と第二章の違いはもう一つあります。第二章では、人間の創造が中心に位置するんです。それだけが主に書かれている。しかも非常に女性的に書かれています。第一章では、光をおつくりになってね、海があって、陸地をつくって、そして今度はそこに住むいろんな動物を作って、最後に人間を作る。だから、人間というのは、第一章においては、創造の頂点であるわけです。第二章は、人間を中心に書かれています。しかも非常に女性的に書かれています。

第一章、創造の物語というのは、ユダヤ人がバビロンに捕囚されていた紀元前六世紀頃に、司祭集団によって書かれています。ということは、司祭というのは学問があるわけですから、非常に神学的な考え方が裏にある文章を書いているわけです。しかも、天地創造の七日間というのは、今我々の生活では、ヨーロッパでも日本でもどこでも、世界中七日間ですよね。これはその頃に生まれているんです。捕囚期の中で、七日制度というのがイスラエルの国民の中で生まれ、その考えの枠組みで創造を考えた。神は六日間 <sup>はたら</sup>活かれて、最後に神様はお仕事を休まれて、安息された。だから人間は六日間働いて、七日目の日曜日に休むんだ、という制度ができた。面白いですね。そして、それはユダヤ教の非常に中心的な考え方です。だから第一章というのは、そういう意味で非常に重要な文書でもあるわけです。

その考えの裏に、もう一つの面白い考えがあります。「神様は <sup>はたら</sup>活く、だから人間が <sup>はたら</sup>働く」。それは、ギリシャ思想、或いは近代の哲学と比べると、まったく違うんです。後者では、人間は理性的な動物で、「考える」ということがまずは特徴なんです。

みなさんの中にも男性的な人がいて、よく考える、それが人間らしい一番いいことである、と思っている方がいるかもしれません。日本の今の、経済的な発展とか、いろんな発明とか、みんな頭でやっているから。しかし、そういう文化ではない。『聖書』は、はたらく、ということが中心です。<sup>おんちち</sup> <sup>はたら</sup>御父が活く、だから私達も <sup>はたら</sup>働く。

イエスさまの言葉にもちゃんと書いてあります。<sup>おんちち</sup> <sup>はたら</sup>御父が活く、だから私も <sup>はたら</sup>働く。これはイエスさまの考えです。<sup>おんちち</sup> <sup>はたら</sup>御父が活いて、<sup>おんちち</sup> <sup>はたら</sup>救いの業を <sup>わぎ</sup>されている、だから私も救いの業をしている。

人間とは働きをするもの、行為するもの。これは、ものすごく重要なことです。特に女性は、一般的な考え方で、殊に戦前のことを考えると、女性は低い者として見られていた。或いは聖書の中で、中世までの神学では、女性は男性とは違って、人間ではない、と考えられていた。本当ですよ、それは。トマスの中に出てくるんですよ。これはひどいですね。

これがどうしてかっていうとね、考える、っていうことを中心にするからです。理性ということ。しかし女性は、働いているんですよ、家庭の中で。本来の人間の姿なんですよ。面白いでしょう、それと聖霊が関係するんです。

聖霊は、見え<sup>み</sup>ない形での活<sup>はたら</sup>きによって、すすめている。うながしによって、人間は生きています。働いているんです。働く、ということが大切なんです。補助的に、頭で考えるということが大切であるということは確かです。しかし、それは智慧です。理性ではなくて智慧。そしてそれは、聖霊によって与えられる。行動の中でわれわれは行う、ということが大切であって、それを導いているのは聖霊です。私達は、聖霊が与えてくれる智慧によってそれを見分けて、自分の進むべき道を行かなきゃいけない、ということが聖書の中の中心的なメッセージである。

それで、このあいだ7月の七夕の日の公開講演会でも話しましたが、からだは聖霊の神殿なんです。体に与えられるんです。これは七月の話の中心でした。しかも、その中でも一番大切なのは、肚<sup>はら</sup>なんです。母胎なんです。聖霊は宿<sup>ま</sup>る、生<sup>な</sup>む、という。それはみんなおなかです。

『聖書』の御言葉、というのは、その関連でたいへん面白いのは、もちろんまず耳を通して、頭で理解して、胸ですこしあたたためて、肚<sup>はら</sup>にとどまる、という。だから肚<sup>はら</sup>でものごとを考え、肚<sup>はら</sup>で『聖書』の言葉を受け取らないといけない、ということです。聞いて、そしてずうっと深く、肚<sup>はら</sup>でものごとを考える。パウロはその言葉を使っている。肚<sup>はら</sup>で考えるということ。霊に息吹かれ、「力」(dynamis)と「権能」(eksousia)に満たされ、全身を智慧で満たし(渾身般若)、「はらわた(愛)」と「肚<sup>はら</sup>で考える」(phrenein)。

聖霊が与えてくれるものは、ですから、肚<sup>はら</sup>で考えないとわからない。頭で考えてもわからない。面白いですね。それに女性はね、よく考えてみると、肚<sup>はら</sup>で考える。

一つの例を示すとね、子供のなかで、一番能力のない、あるいはハンディキャップの人を、もっとも、母は心配して世話をするんですよ。それは<sup>はら</sup>肚で考えるから。そしてそのハンディキャップの子どもの中に、神の<sup>はたら</sup>活きがもっともよく現われてくるんです。それは大江健三郎の、あの光ちゃんの話の中に出て来るんです。大江健三郎の文学は、あの光ちゃんがいなかったら生まれなかったんです。これは私は、ちゃんと論文として『世界』という雑誌の中に書きました。そしてそれは認められたと思います。面白いですね。

だから、いかに聖霊というものが女性的なものであるか、ということが、具体的な例でわかるわけですね。例えば、今度の東日本大震災で、ある若いお母さんが、自分の、わりに高台の上にある家の二階にいたんです。津波の第一波で、その家の一階まで水に浸かったんです。それが引いて、第二波が来たときには、二階にいてもだめだったんです。それで、子どもを上を上げて、子どもだけ救おうと思ったんです。その間に意識を失ったんです。そして、ぱっと目覚めてみると、気が付くと、自分も子供も生きています。こういう経験が<sup>はたら</sup>霊的な経験なんですよ。

それで、彼女はこう言っているんです。この日常生活、子供と一緒にこうして生きている、お乳を与えて世話をしていることが、恵みだ、と。その経験で知ったんです。面白いですね。苦難を経て、そこに十字架の意義が関わってくるんですけれど、苦難を経て、一度死んで甦って、はっと、生きていることが恵みだ、瞬間瞬間、日常生活の平凡な出来事が恵みだ、とわかるんです。これは聖霊の活きです。

そういう経験は、皆さんの中にも、よく考えればたくさんあると思います。具体的な例で言いますと、私は今菜食主義で、サラダとかいろんなもので生きているんです。サラダですと、五十回噛まないといけないんですね。医者も、私は名医の漢方医に3人会ったことがあります、みんな、三十回噛みなさい、とか、五十回噛みなさい、と言う。そうすると、快食というのがあって、快眠というのがあって、快便というのがあるんです。

その最初の快食というのが五十回噛むことで得られる。五十回噛むというのはね、その人の人格を形成するんです。我慢して、一所懸命、ずっと噛んでいるわけです。現代の生活で、五十回噛む人はいません。ここ

で、誰かいますか、五十回噛む人は？ 五十回噛むとね、味が出てきて、唾液が出てきて、体の中に免疫性が蓄積されるんです。これ聖霊の活きはたらですよ。面白いです、本当に。

そしてね、貧しいものを食べる、禅堂で。私は禅の精神で生きていますから、朝、お粥と、梅干と、沢庵、それだけ。貧しくて、みなさんにとってはつまらない、おいしくないものだと思うかもしれません。けれど、私は本当に幸いだと思っています。坐禅をするとね、すごく敏感になるんです。味も、音も、あらゆるもの、見るものも。そしてそこに、神の活きはたらが見えてくるんです。その貧しいお粥の中に、恵みだ、と分かるわけです。貧しきものは幸いである、神の国に入るから。神を見るから。具体的に言うとそういうことです。

その貧しい生活の中で、この塵である私にこんなものを下さった、神様は、毎日こんなに、と。すばらしい味がするんですよ。それを経験したとき、『聖書』の言っていることは、ぴんぴん来るんです。貧しいものは幸いであるという言葉が、本当に生きた言葉として体全体を刺してきます。

不幸、苦しみ、そういうものがやってきたときに、それは十字架に扱うということでもあるわけです。だからこそ、恵みなんです。病気や、老人になること。私は今八十六歳ですけど、足が駄目になって、もういろんなことに障害が出てくるんです。それをなんとか克服するんです。そうすると、すごい恵みが来るんですよ。それは驚くべきこと。

だから、イエスさまの教えっていうのは、本当に聖霊の中で読むときに、体全体を打つんですよ。頭ではありません。体全体。変えるんです。活性化するんです。生かすんです。そして、それは、創造の活きはたらと深く関係してくるんです。その話をこれから少ししようと思います。

だいぶ寄り道をしましたが、『創世記』の第一章、創造の物語では、神は創造の活きはたらを五日間にわけてやって、そして最後に人間を創造され、七日目に神が安息された、と。ここでは神様は非常に超越的で、神中心なんです。神が、何々をした。ですから、第一章では、ピラミッドの頂点が人間の創造です。第二章では、人間は、創造の業わざの円の中心です。第二章は、いつも人間を中心に考えている物語なんです。

第二章の書かれた、紀元前十世紀というのは、ものすごく古いんです。ダビドの時代。ダビドが生まれて、王国を建てる。王国を建てる文化というものが生まれる。で、王国の年代記が書かれるわけです。そういう関連で、書くということ、書き残すということがだんだん始まった。そして、『聖書』はそれまで口伝であった、口で伝えられていたものが、だんだんその時代から書き始められた。その時代の文章です、第二章はね。

ヤハウィストと呼ばれる人々によって書かれた。ヤハウィストは多くの聖書作者の中で最も芸術的で、感動的な物語作家です。「人間の創造物語」は、素朴な筆致で、簡潔な詩的な文章で書かれている。

非常に文学的な、感動的な物語を書いていきまして、そしてその場合に、神様の<sup>はたら</sup>活きを人間的な、人間の働きになぞらえて表現する。擬人法という、難しい言葉で呼ばれているものです。

一番いい例は、全能の神の<sup>はたら</sup>活きというのは、皆さん、その全能、というのは、みなさん頭で考えてわかるような気がするでしょう？ その全能は、頭の理解であって、本当の理解ではないんです。表現できません、神様の全能はね。それを、もっと素晴らしいことばで、擬人法的に、人間の働きになぞらえて、「手」というもので表わします。

人間の働きのなかで、一番手が使われるんです。しかも女性は、家事をして、手でもって仕事をするんです。そうでしょう？ 男性は頭で仕事をするんです。コンピューターでやってるんですから、それはみんな頭ですね。しかし女性は、野菜、肉、そういうものに直接触れて、創造の<sup>はたら</sup>活きの結果ですから。それに手でさわって、手で、神の創造の<sup>はたら</sup>活きに直接触れている。素晴らしいでしょう。だから、聖霊に近いんですよ。みんな、驚いた顔していますね。

そして手<sup>はたら</sup>というとき、「神の手」というとそれは全能の<sup>はたら</sup>活きを言うのです。手のはたらきというのが、ものすごいんですよ。名人の手、というのはみなさん聞いたことがあるでしょう。これは、ものすごいんですよ。手によって、ものすごいことができるんです。一番最後の完成は、機械ではできないんです。たとえば、現代の最新のレンズ、天体望遠鏡のレンズを磨くときに、最初は機械でやるんです。しかし、最後は手でやるんです。手でしかできないんです。手は、それほど微妙なことができる

んですよ。それほど全能なんです。力が、はたらきがこの手の中にあるんです。それで、「神の手」というのは、神の全能を表わすという。面白いでしょう。

今日ね、シスターのところで、ミサを立てて、ご聖体を差し上げた。その時、私は顔は見ないんですよ、手を見ている。それで、はっとびっくりしたんです。手で受けている、そこへ差し上げるのは、ものすごいことだなと気がついたんです。シスターの手というのは、修道生活で、ずっと何十年間使っていて、神に仕えていた、その手なんです。それに聖体をあげている。はっと驚いて、その働き、シスターたちの生涯の働きを、支え、助けていたのは、神の手なんです。全能の手なんです。すごいでしょう。こういう表現の仕方も、聖霊の活きによる仕方なんです。

次に、言葉。言葉はね、活きなんです。出来事なんです。光あれ、っていうと光ができちゃうんです。それから、挨拶をするんですね。主の平和、という挨拶です。シャローム。挨拶すると、その人のその言葉が、相手の中に実現するんです、相手にそれだけの準備があれば。言葉が、本当にその相手に平和をもたらす活きをするんです。それがヘブライ語なんです。ヘブライ語で「言葉」を「ダバール」と言います。ヘブライ語の「言葉」(ダバール)は、出来事であり、事物を変える「活き」です。たとえば、「光あれ」という神の言葉は、光を創造する活きです。

だからたとえば、私が司祭として、イエスさまがおっしゃったパンの聖別のこと、「これは私の体である、人々のために渡された体である」というと、実現するんです。それで皆さん、信じているでしょう？ カトリック信者ならそういうことによって、言葉が活きである、ということはよく分かるでしょう。

そして光あれ、という時にも勿論そうですし、聖書の言葉、イエスさまの言葉は、説教の言葉であると同時に、活いているんです。説教していると活くんです。本当の説教、本当の話は、言葉で皆さんの中に、それを実現させるんです、聖霊によって。すごいでしょう。皆さんが私の貧しい話を聞いて、感動したら、これは聖霊の活き。私の働きではなくてね。私の説教がうまいから、講演がうまいからではないんです。聖霊

の活はたらきなんです。感動を与えて、感動を新しくして、新しい力を与えて。

こないだの七月の講演の話で、講演会に参加した方から聞いたんですが、何だか知らないけれど、私の話を聞いたら喜びと力がわいてきたと。これですよ。私の貧しい話のなかに、聖霊はたらが活はたらいていて、みなさんに、感動と力と、喜びを与え、平和を与えているんです。これが聖霊です。本当に具体的なんです。だから、聖霊について深く考えるということがどれほど大切であるか。しかも、頭でなく、体でね。

その意味で、創造の物語というのは非常に大切なんです。今からそれを話します。

大自然を創造された神様と、それから、歴史を動かして全人類を救われる神とは、分かれていません。ところが、大自然をつくった神様、創造された神様と、救いをなさる神様は分裂していたのです。今までの神学の中では。

そして、皆さんは、自然を見るでしょう？ 日本人は自然が大好きだと、世界の中でもっとも自然を大切にするといいます。今の日本人はだめですね。しかもその大自然は、神様が創っておられるんです。創りつつあるんです。活はたらいているんです。それを見なければいけません。その活はたらきに感動はたらしなくてはいけない。それは、聖霊によってしか感動はたらされない。聖霊によって創っているんですから。だから、聖霊によってそれを受け止めなければならぬ。頭では駄目です。創造の神様の活はたらきと、救いの神様の活はたらきが一つであるというのは、そういうことを意味するのですね。だから、救いの活はたらきの場合のみ、聖霊が必要であるのではなくて、大自然の中で活はたらいている神様を見るためにも、聖霊が必要なんです。しかも女性のほうがよく見られるという特権を持っています。

創造の行為というのは、今も、創造しつつあるんです。救いも同じです。二千年前にイエスキリストが活はたらかれて十字架にかかって、復活されて、もう終わり、全部仕事が終わった、ではない。その活はたらきは今も続いているんです。「今」というのが大切なんです。その「今」を発見するのは、聖霊によってです。聖霊はたらが息吹いて、その活はたらきをしているから、その聖霊によって私たちは今を自覚できる。頭で考えても駄目です。

第三番目に、物語の全体から浮かび上がってくる神の姿は、人間に慈しみを注がれる、母<sup>はは</sup>的な神である、ということ。それが今日の話の中心なんです。聖霊<sup>せいれい</sup>の母<sup>はは</sup>的な活<sup>はたら</sup>きということ。

「活<sup>はたら</sup>き」という、これは私が作った言葉です。どこのどんな辞書でもない。わざと「活<sup>はたら</sup>く」と、普通の「働<sup>はたら</sup>き」と区別して書いたのは、これは神様の活<sup>はたら</sup>きであって、人間の力では認識できない、聖霊によってしか分からないものだからです。ものすごいもの、表現できないもので、ただ比喩的に、人間になぞらえて、人間の働<sup>はたら</sup>きになぞらえて表現するしかない。

『創世記』は、第二章のほうが最初に書かれて、人間が中心で、人間が創造<sup>はたら</sup>の活<sup>はたら</sup>きの中心になっていますので、そちらを先にみましょう。そのほうがもっとリアルに、神様がどんな慈しみをもって人間を作ったか、ということがわかってくるわけです。

この物語の中で注目すべき点というのは、三つあります。一つは、塵で人の形をつくる。そしてその塵は、大地からとられている。大地からとられているからね、大地とわれわれ人間は、ものすごく深い関係にある。ヘブライ語で、「アダム」というのは「人間」なんです。「土」のことを「アダマー」といいます。人間と土との近親性を指し示します。言葉の上でも似せて書いている。非常に深い関係があるから。物語の中でも、大地から塵をつくって、それがもとになって人間が作られている。

しかも塵というものは、何の価値もないんです。これが大切な点なんです。人間はもともと、何にも価値がないんです。この自覚が必要なんです。どんなに知識があり、どんなに聖霊に満たされても、塵にすぎない。そして『聖書』は、「創世記」三章の中でこう言うんです。「あなたは塵<sup>ちり</sup>である。塵<sup>ちり</sup>から出<sup>で</sup>て塵<sup>ちり</sup>へ返<sup>かえ</sup>る」。これが人間の本質の、最も大切な点なんです。

それがわかったら、自分が塵であることを、本当に自覚したら、すべてが恵みですよ。さっきの、大震災で津波に襲われて水に浸かって、子供を助けようとしているうちにお母さんはそのままき気を失って、あっと気が付いたとき、子供も自分も生きていた。一度は死んだ、しかし、生きていたということは、神様の恵みだとわかる。一日一日が、平凡な毎日毎日が恵みだっということがわかる。

そして第二は、その塵に命の息吹をあげたということ。神様が、吹き入れられた。その命の息吹、ということは非常に象徴的な言葉です。あとからちょっと説明します。

それから第三番目に、その結果生けるものになった、ということ。

その三つの神様の行為によって、人間の創造が描かれています。生ける神。神はね、面白いことにね、生きている神、なんです。聖書の神様の一番の特徴は、命を与え、ご自分も生きている方、活動されている方、生き生きとしている方。そういう方。『聖書』の神観の非常に大切な点です。

そして、命の息吹です。「息吹」、というのはものすごく面白い言葉です。「ルーアッハ」(Ruach) なんです。「ルーアッハ」という言葉は、あとで聖霊という言葉になる。この息吹によって作られて生きている。息吹かれて、この体は、生きるものになった。息をしているものだ。

息と聖霊とは、日本語でも同じでしょう。「いき」と書いてね。漢字に直すと、「生き」と「息」という。同じ言葉で表現されている。つまり生きているもの、というのが、息をしているもの、になった。つまり、命の息吹の、人間の中で一番よく現われているのが、呼吸なんです。呼吸はものすごく深い神秘を現す。

これはね、私は坐禅で呼吸法を習って、丹田呼吸をして、前に、七月の公開講演会で「アバ・パパ」って叫んだでしょう。その叫びも、この丹田でなされる、聖霊によってなされる、ということを意味するんです。神様の息、息吹が深く貫かれている。神の命の息吹に吹き付けられて、塵が呼吸をするようになった。生きるようになった。面白いイメージでしょう。

そしてそれをね、坐禅をしながらやっていると、まず第一に、塵だ、ということに自覚ができる。何もない、ということがわかる。それには、やっぱり一度死ぬ経験がないと駄目ですね。面白いですね。何もなくなっちゃうんです。

私なんかね、もう八十六歳だから、いつ死んでもおかしくないけれど、時々、死の経験をちょっとだけすることがあるわけですよ。例えば、水泳しているでしょう。そして、途中で水を吸い込んでしまって、わあっと。本当に死ぬ経験みたいなのをするんですよ。気を失う寸前まで来ると

す。それがそのままずっと行けば死んじゃう。この体はそういうものなんです、本来。

そのほか、いろんなことがあるでしょう。そして、それをそういう小さな経験を、注意深く積み重ねていくと、我々が塵であるということは非常に重要なことになるんです。塵、という、価値のない、無用なもの。吹けば飛ぶようなもの。

『コレヘトの言葉』<sup>ことば</sup>という、『旧約聖書』の面白い説話の中で、人間は動物に何ら勝るところはない、と言っています。みなさん、動物より勝っていると思っているでしょう？ コレヘトは違うんですよ。「人間は動物に何らまさるところはない。すべては塵から成った。すべては塵に返る」(『コヘレトの言葉』 三 19～20)。人間は、動物に勝っていない。何故ならば、すべては、動物も人間も、塵から成っているからだ。塵であるというところで何も偉ぶることはできない。その認識はものすごく大切です。

特に現在は、エコロジーの問題があるでしょう。そして、環境破壊があるでしょう。人間中心主義的になって、全部自然を使いこなしている人間によって、大気汚染がおこって、原爆を作って、もう、全人類が何べんも死んでもいいような。今の原爆が爆発したら、人間は完全に吹き飛ばすんですよ、全人類吹き飛ばすんですよ。一回や二回じゃないよ。何千回ではないよ、何万回ではないよ。ものすごい原爆があるんです。そういう時代に生きているんですよ。そしてそれは、塵と関係しているんですね。我々は、本当に塵だ、という自覚をすると、そういう馬鹿な真似はしなくなることを象徴的に示している、もっとも適した言葉なんです。

神様の創造<sup>はたら</sup>の活きはなかなか分からないんです。それを『創世記』の第二章では、ヤハウェイストの、紀元前十世紀の、自分の宗教体験を表した言葉として書いてくださった。神様が命の息吹で、塵である人間を活性化してくださりつつあるんだ、という体験をしたんです。そして、その関連で、命というのは、非常に中心的になるでしょう。そして、神が生命の神であって、疲れることも、力衰えることもないような、驚くべき生命力をもったもの、しかも全てを焼き尽くす情熱を持った方を、生ける神、と名付ける。そして、それが『聖書』の神様の中心的な考え方です。全能の神なんていうことはないんです。生ける神。

全能ということばは、ラテン語で「オムニポテンス」(omnipotens)と言って、英語でもなんでも、今のヨーロッパの言葉になっています。聖書の言葉ではないんです。それよりも、もっともっと具体的なもので、それよりも「神の手」で表わす。私たちの手の働きをよく考えれば、「神様の手」というものが、全能の活きはたらをしている、具体的な場で、全能というと、何か抽象的な世界です。生けるもの、生きているもの、神の命に生かされて、かけがえのない価値のあるもの、聖なるもの、命、愛にあふれたものになった、ということ、象徴的に示す。

みなさん一人ひとりがそうなんだよ、かけがえがないんです。どうしてかという、命の息吹、神の命の息吹によって息吹かれて、生かされているんですよ、直接に、毎瞬毎瞬。聖霊に生かされているんです。だから尊いんです。一方では塵で何もないんです。しかし、聖霊によって、息吹によって、ものすごい価値のあるものになる。

『創世記』一章の天地の創造の正しい解釈。

私が神学と哲学とを勉強したときに、創造っていうものは、無からの創造っていう。みなさんもどこかで習ったと思います、創造は、無からの創造だと。あれは聖書にないんです。ちゃんと、まず最初に、創造の前提になっているものがある。混沌であって、闇であって、深淵であって、水なんです。恐ろしい水なんです。無からの創造ではないんです。『創世記』では、無からの創造ではないんです。そういう混沌の状態にあったものを、コスモス、秩序あるものにしたんです。これが創造なんです。闇だったんです。真っ暗な闇、それに、光を与えた。

これはね、皆さんも、闇の経験をするとうかると思います。私は二度、二つの闇を経験しました。一つは、北軽井沢という田舎の田舎でね、山の中にある。真っ暗、本当に真っ暗です。外を歩くと、真っ暗闇で、しかもね、猪と熊が出るんです。恐ろしいですよ。その真っ暗な闇の中、それが一つの経験です。

それからもう一つの経験は、私は終戦というものを、二十歳で経験した。戦争が終わって、今までは、日本は神国で、天皇は神様で、そのために命を捨てたんです、みんな。それが全日本人の観念の中にあった。戦争が終わって、それが、嘘だ、と分かったんです。ぐらっ、となった。

真っ暗。希望がない。その虚脱感というのかな。お年よりの方には、いくらかそういう経験があると思います。終戦のときの、本当に、何の希望もないような経験が。私はまだカトリック信者でもありませんでしたから、本当にすごかった。

創造のときに、光あれ、という光ができた。この世界は、今も、闇の中を光にしておられるんです、神様は。それが創造の<sup>はたら</sup>活き。

御来迎<sup>ごらいこう</sup>ってというのがあつたでしょう。皆さんもいらしたことがあると思います。ずうっと真っ暗であつたところが、太陽が昇つてね、光が射して。あれなんかは、創造のときの<sup>はたら</sup>活きを思い出すために非常にいい機会だと思つています。そういう経験を通じて聖書を読むんです。

闇を、光に満ちた世界にしているんです。荒れ狂う大海を、安定した陸地にするんです。これらのことをなすとげたのが神の霊であり、息吹なんです。命を与える母のように<sup>はたら</sup>活く。これを、『創世記』第一章の中で、先ほど言ったように、女性の神学者が発見したんです。こういう活きはみんな女性的だつていうんです。

それから、特に面白いのはですね、まず光があつて、そして、一つひとつの<sup>はたら</sup>活きのときに、これらが「よかつた」つて書いてあるんです。全てのもの、創られたものを<sup>はたら</sup>ごらんになつて、「見よ、それはきわめてよかつた」。一つひとつの出来事、お創りになつたものをご覧になつて、すべてよかつた、と。そして最後に、極めてよかつた、と。

その「よかつた」という言葉はヘブライ語でね、たいへん善であるとか、そういう抽象的な言葉ではないんです。「うまかつた」、「おいしかつた」、という感覚的な言葉なんです。面白いですね。神様のその言葉を、そういう感覚的な、感動で表すんです。これはものすごい深い意味を持っているんですよ。抽象的に創つたものを、善かつたな、つて言っているのではないんです。本当に身近な、感覚でわかるような、「ああよかつた。」と。

別の言葉で言えば、我々は創造の<sup>はたら</sup>活きを見るとき、感覚を使うんです。研ぎ澄まされた感覚です。霊によって活性化されたその感覚が、非常に大切なんです。先ほど言いました。貧しいものを味わうことによって、霊が動き出す。貧しくなると霊が動くんです。与えられるんです。それで、その貧しいお粥は、山海の珍味よりもおいしいんです。どんなグル

メの、贅沢なものよりもおいしいんですよ、霊に動かされると。それが、創造の活はたらきが「よかった」という、そこへと通ずるんです。

だから、聖霊を本当に大自然の中で、あるいは日常生活の中で、本当に聖霊を味わうためにはどうすればいいかっていうことが、だんだん分かってきたでしょう？ 貧しくなるんです。皆さん贅沢な格好していると、絶対に聖霊というものは来ない。だからイエスキヤウの、「貧しきものは幸いである」という、本当ですよこれは。

そうすると、貧しいもの、何もない私の、つまらない塵であるものが、こんな恵みを受けている。本当に恵みなんです。すべて恵みなんです。すごいものです、本当にすごい。頭で考えるより、身体を霊によって動かされて活性化されることによって、聖霊の活はたらきを感じとるんです。どうやって聖霊を感じるかっていうことがだんだん分かってきましたでしょう？ 苦難を受けるんです。

いろんな苦難があるんです。それを耐え忍んでいくんです、イエスキヤウに倣って。そのとき聖霊が与えられるんです。だから、病気は幸いであるんです。神の恵みだ。これは聖イグナチオの言葉です。彼は非常に病気がちな人でしたから。その病気の中で、本当に神の恵みがわかる。非常に逆説的なんです。普通の人の方が幸いだって言うのとね、全く逆なんです。「山さんじょう上の垂すい訓くん」がみんなそれを言っているわけです。

『創世記』の第一章の創造が母的なものだということが、大体わかったと思いますね。混沌のものをコスモスに与えて、闇を光にされて、荒れ狂う大海を安定したものに。こういうものを為し遂げたのは神の息吹であって、命を与える。そして慈しみをもって、全てのものをよくなさる。よきものだ。さっき申し上げたように、感覚的によきものである、と言う。母はは的な、命いのちを与える母ははのように活はたらいている。その意味で第一章の天地創造の活はたらきも、母はは的な活はたらきであって、命いのちを与えるものだ、ということがわかっていただけだと思います。

ところが、残念なことが起こるわけです。それは原罪という出来事が起こる。神様はこんなにすばらしい世界を創られて、人間をすばらしいものにつくったんですけれど、人間罪を犯しちゃうんです。そこから人間の不幸がきて、今もそれが続いているんです。

原罪の結果、今現在、何があると思いますか。戦争。殺害。憎しみ。原爆、あの原爆で、四十万、二十万の人が死んじゃうんですよ。ナチスのあのコンセントレーションキャンプに入れられて。六百万の民を殺しちゃうんですよ。ガス室に入れたんです。殺したんです。

我々の時代ほど、原罪の現実と直面できる時代はないと思います。今も続いています。イラクでアメリカの領事館が焼かれて、4人殺されるんです。あんな悲惨なことをね、宗教の名によって行っているんです。驚くべきことです。それで、自分達に罪の意識はないんです。それは、私たちの中にもあるんです。そういう傾向性というのは、どこかにあるんです。私なんか、自分でときどきはっと気がつくことがあります。

そういう人間を救うために、イエスが来られたんです。だから現在ほど、原罪の結果がよく表れて、そしてそれを我々が体験できる時代はない、ということは何を意味するかというと、イエスの到来、十字架と復活が必要だ、ということが最もよく知れる時代に、我々は生きているということ。これ以外に救いはないんです、人類に。イエスの到来、あの十字架と復活が、絶対に必要だということが、現代ほど必要な時代はない。

そして、『新約聖書』における聖霊の救いの<sup>はたら</sup>の活き、イエスの生涯の中でずっと、聖霊がイエスさまを動かしていることを見て行きます。イエスの時代と、教会の<sup>とき</sup>「時」というのが、そこから神の<sup>はたら</sup>活き、御父の<sup>おんちち</sup>活きを<sup>はたら</sup>加えた意味で、「時」ということになる。「カイロス」ですね。

イエスさまの生涯を見ますと、聖ヨハネによって洗礼を受けるんです。そしてその時、霊がイエスさまの上に降るんです。謙ったから、降ったんです。これは重要なことです。イエスは<sup>つみびと</sup>罪人として洗礼をお受けになったんです。洗者誓願の洗礼は罪人に与えられる洗礼なんです。それをイエスさまはお受けになって、それほど謙ったから、聖霊が降ってきた。謙りと聖霊とは、ものすごく深い関係がある。原罪以後の時代には、それなしには聖霊は降ってこない。イエスさまはそれを体で実行されるんですね。

そして霊と火によって洗礼を施すようになるんです、イエスさまは。イエスさまの活動は霊に満たされ、霊をもたらすメシアとして、終末論的<sup>はたら</sup>な、最後の完成者としてこの世に現れ、そして今も活き続けておられ

る。

また、霊の方から見ると、イエスを荒野へ導かれて、イエスさまの宣教の全生涯を貫いて生きていた。霊がイエスさまを活かした、そういう見方をできる。そしてイエスの人格とその出来事を通じて、霊が人間と宇宙に浸透して、終末論的な救いが、最後の救いが、完遂され、成就している。これが、イエスさまのなされたことです。

それをパウロが注解した、西洋的な比喩を排除して。西洋的な考え方を入れると駄目です、聖霊はまったく分からなくなってしまう。

私の生涯のなかで、こういう勉強、体験があります。私は神学と哲学を、ものすごく勉強したんです。だれよりも勉強したと思っているんです。それで、それが終わったとき、博士論文を書いてきたときに、世界のことは何でもわかった、という感じだった。そして、それは頭で分かったのであって、聖霊で分かったのではなかったの、本物ではない、ということ、今、本当に分かった。

頭の理解は、全然活動できないんです。働かないんです。

だから神学をやる必要はない、ということは言いませんよ。神学を大いにやっていただきたいんです。特に今の神学は、かなり聖霊の活きについて語っていますので、是非そういう意味で勉強していただきたい。特に、聖書神学を勉強していただきたい。

聖霊によって、霊に息吹かれて、そしてその特徴、力、権能、が満たされるんです。そして全身に、力、権能、智慧、そういうものが与えられますので、肚で、「はらわた」というのは大切です。そして、それは愛なんです。「はらわた」という言葉はヘブライ語で「愛」を意味するんです。面白いですね、この表現はね。

だから、お母さんは、さっきも言いましたように、「はらわた」で子どもを愛するんです。そうすると、一番できない、一番駄目な子供が、本当に可愛い。それを、最も良く世話をするんです。

肚で考えるというのをやると長くなりますので、今度は、「時」という考え方の中でお話します。「カイロス」。我々は大体、時計で測った生活をしている。これを「クロノス」といいます。これは「物理的な時間」です。けれど、「カイロス」というのは「時」なんです。神様が活いている時。キリストの、イエスの「時」。人間イエスのなかで、神が活いてい

る時。

それは、「神の国」が近づいた、という言葉で始まって、霊の活はたらき、救いの活はたらきがイエスの人格と活動において成就しつつある、ということの意味するわけです。霊は生かすのです。だから母はは的なんです。生かすんですから。

私があなた方に語る言葉は、イエスさまの言葉ですよ。言葉は霊であり命である。イエスさまの『聖書』に書かれている言葉は、この言葉です。霊であり、命なんです。霊を与えとか何とかではない、霊そのものです。そして、命いのちなんです。言葉が命。

イエスの活動に、霊が現臨げんりんする。そしてそのイエスの活動が、救いの業わざとなる。ということ、それは霊によってなされている。霊が人間に命と救いを注いでいるんです。注ぐんです。だから霊というのは、終末論的な鍵の言葉です。もっとも大切な言葉です。特に現代において。

そして、「霊」というのは、『聖書』を解く「鍵」であり、世界の謎を解く鍵でもある。我々の生活の中の鍵でもある。そして、霊が人間に命と救いを注いでいる。言葉と霊の一致ということが、ここで、イエスさまの救いの業わざによって行われている。

例えば、イエスの福音、ということが言われているでしょう。この、福音というのは、神学的には、メッセージです。イエスさまが述べたメッセージ。それは聖書はたらでいう福音ということではないんです。福音というのは、述べながら活はたらいているんです。聖書はたらというのは、読みながら、私達の中に活はたらくんです。読む人のなかで活はたらくんです。

とくに、聞くんですね。聖書を、聖書朗読で、典礼の中で、読まれて、それを聞く。そこに霊はたらが活はたらく。ですから、言葉と霊の一致はたらがあって、それが福音であって、福音は言葉であって、霊であって、活はたらきなんです。

処女懐胎は、霊によるイエスの生誕であって、そして、霊と力によって、イエスの宣教が行われるんですね。それが『使徒言行録』の中にずっと書かれているわけです。

イエスさまが亡くなられて、この世を去られた「時」に、教会を残された。そこに聖霊はたらが活はたらく。イエスさまは、苦難を前にして全ての信者に向って、「わたしを信じる人は、その人の肚はらから活ける水の川いが流れ出るだろう」（『ヨハネによる福音書』七38）というのです。活ける水という

のは聖霊なんです。それが流れ出るだろうという。そして、苦難を受けた後、復活を証しするために使徒たちに現われて「聖霊<sup>せいれい</sup>があなたがたの上に降るとき、あなたがたは力<sup>ちから</sup>を受ける、地の果てまで、わたしの証人となるだろう」（『使徒言行録』一八）と、彼らにおっしゃった。イエスさまがこの世をさられた「時」に、使徒たちの上に聖霊が降って、教会が残されたのです。

そして、今、新約の時代の中で、われわれ一人ひとりの中で、溢れるばかり肚<sup>はら</sup>の底から、生ける水、聖霊が湧き出ている。みなさん一人ひとりの中で、信者の一人ひとりの中で、それが行われつつある。それが新訳のメッセージです。ものすごく意味深いメッセージです。

しかもこのメッセージは一人ひとりにですから、一人ひとりから聖霊が湧き出ている。肚<sup>はら</sup>の底から湧き出てくる。頭に注がれるんではありません。そして、体全体を動かすんです。そして、いろんな活動へと向かわせるんです。

主婦であれば、家族のために食事を作る、裁縫をしたり、いろんなことをする。すべての活動はその聖霊によって動かされているわけです。活動を見るんです。行いを見るんです。そしてそれが愛ということと関係するんです。

我々の活動、皆さんの活動、特に、動かされて人に尽す、愛を尽す、いろんな仕事があるでしょう、そういうことに通じていて、そしてそれが、聖霊が私達のなかで、肚<sup>はら</sup>の底から湧いている証拠なんです。それを示すのが、現在の教会の姿、そして、皆さんの使命なんです。一人ひとりの使命なんです。

もう注がれているんです。肚<sup>はら</sup>の底から湧いてきているんです。それに動かされて、いろんな日常生活をするんです。特別なことをする必要はないです。日常生活の真っ只中で、いろんなことがやれるんです。

どうもありがとうございました。

（付記：本稿は2012年9月15日に行われた藤女子大学キリスト教文化研究所主催の公開講座を文章化したものです。）